埼玉県立
歴史と民俗の博物館
THE MUSEUM
彩の国埼玉県
Vol.9-3 第27号 2015.2.20
Saitama Prefectural Museum of History and Folklore

（上）川瀬巴水　大宮氷川公園（部分）　昭和5(1930)年　当館蔵
（下）県指定文化財　氷川神社行幸絵巻（部分）　明治22(1889)年　武蔵一宮氷川神社蔵

当館が所在する大宮公園は、今年開園130周年となります。

現在は市民の憩いの場として定着している大宮公園ですが、開園後、特に明治末から昭和初期にかけては東京近郊の有数の行楽地として知られていました。公園となる前、この一帯は武蔵一宮として知られる氷川神社の境内地であり、また縄文時代以降の遺跡が点在し、古くから人々の営みがあった土地であることもわかっています。

この企画展は、長く大宮地域の中心となってきた武蔵一宮氷川神社と、その旧境内地にできた大宮公園の歴史と文化がテーマです。ここでは展覧会でご覧いただける資料をいくつかご紹介します。

企画展

氷川神社と大宮公園

平成27年
3月21日(土/祝)～
5月10日(日)

1　氷川神社と公園内の遺跡

平成24年、氷川神社境内で神札授与所建設に伴う発掘調査が行われ、土器や耳飾りなどが出土しました。縄文時代後期から晩期(約4000～3000年前)の祭祀遺跡と考えられます。出土遺物の一部をこの展覧会で初めて公開します。

また平成元年から4年にかけて野球場周辺整備に伴い発掘調査が行われた氷川神社東遺跡は、仏教と関係の深い遺物が出土し、神社の祭祀の性格を考える上でも注目される平安時代の遺跡です。ここからは日本最古の口琴(こうきん)をはじめ、金銅仏、浄瓶(じょうへい)などが出土しています。

2　古代から近世の氷川神社

古代から中世にかけての氷川神社の様子を具体的に物語る資料はほとんど残っていません。

10世紀に成立した「延喜式神名帳(えんぎしきじんみょうちょう)」では官弊社(かんぺいしゃ)の社格を持つ神社として記載されています。藤原仲麻呂の乱で功績を挙げた武蔵足立郡司の一族、丈部直不破麻呂(はせつかべのあたい ふわまろ)が中央政府内で力を持ったことが、氏神である氷川神社の発展に大きく貢献したと考えられます。

中世の氷川神社は神仏習合(しんぶつしゅうごう)の影響を受け仏教的な性格が濃くなっていきました。修験者(しゅげんしゃ)の活動により氷川信仰が広まり各地に氷川神社が勧請(かんじょう)されます。寛政2(1784)年の氷川神社の絵図（図1）を見ると、氷川神社境内には、男体宮(なんたいぐう)、女体宮(にょたいぐう)、簸王子社(ひおうじしゃ)の3社をはじめ、門客人神社ほか摂社、そして現在の参道脇にあたる場所に僧坊が立ち並ぶ様子が描かれています。多少の変遷はあるものの、おそらく中世以来江戸時代を通じてこのような形で社殿が建っていたと考えられます。

3　明治維新と明治天皇の行幸(ぎょうこう)

慶応4年すなわち明治元（1868）年は、氷川神社にとって、まさに激動の1年でした。

新政府が3月に出した神仏分離令(しんぶつぶんりれい)は、神社側にとっても組織を大きく変える大変な出来事でした。当時境内にあった寺は観音寺をはじめすべて廃寺となり、観音寺住職は上加村の満福寺（現さいたま市北区日進町）へ退去します。このとき、観音堂の仏像および仏具なども満福寺へと移されましたが、その観音堂仏像が聖観世音菩薩坐像(しょうかんぜおんぼさつざぞう)（図2）です。

神仏分離令が発せられてからわずか7ヶ月の後、氷川神社は勅祭社(ちょくさいしゃ)となり、10月28日、明治天皇の行幸を迎えることになります。

明治元年の行幸については多くの資料が残されています。氷川神社行幸絵巻は川越氷川神社の宮司であった山田衛居(やまだもりい)が描いたものです。本画だけでなく原本(元図)および下絵の計3巻を展示します。

図1　さいたま市指定文化財
西角井家所蔵文書のうち
「武蔵国一宮氷川神社宮中絵図面」（部分）
寛政2（一七八四）年
個人蔵

図2　聖観世音菩薩坐像　江戸時代　満福寺蔵

4　公園開設

明治になり、官有地となっていた氷川神社の旧境内地に公園を作る本格的な動きは、明治 16(1883) 年の鉄道開通時、大宮に駅ができなかったことで町の衰退を危惧した人々による大宮駅設置の運動と一緒にはじまりました。

明治 18(1885) 年 3 月 16 日、大宮駅が開業し、9 月 22 日に大宮公園（当初の名称は氷川公園）が開園します。最初の公園設計は佐々木可村（ささきかそん）によるものでした（図３）。

図３　佐々木可村設計　氷川公園ノ図（写）
原図は明治 17(1884) 年作成
（公財）東京都公園協会蔵

5　有数の行楽地へ

このころの大宮公園が現在と大きく違う点は、園内に旅館や茶店があったことです。東京から気軽に行ける観光地として人気があり、文学者や美術家も多く訪れました。

当時の大宮公園での遊興を物語る作品の一つが長清会大宮遊図巻（ちょうせいかいおおみやあそびずかん）(図 4) です。明治 32(1899) 年、フランスへ留学する洋画家・浅井忠（あさいちゅう）の送別会を兼ね、新聞「日本」を主宰していた陸羯南（くがかつなん）を中心とする囲碁の会の面々が大宮公園を訪れる様子が描かれています。絵は浅井忠、陸羯南が詞を書いたユニークな作品です。

観光客は増加したものの、園内の施設は旧来のままで、拡張整備を望む声が上がるようになりました。大正 9(1920) 年に公園の改修が決定し、本多静六（ほんだせいろく）に設計が依頼されました。運動場や遊園地的な施設を備えた公園としての方向性はこのときに決まり、園内の旅館の立ち退き、桜の植樹などが進み、現在の公園の原型となりました。

図４　長清会大宮遊図巻（部分）明治 32(1899) 年　個人蔵

6　昭和の氷川神社造営

昭和 7(1932) 年、氷川神社境内の社殿ほか各建造物、参道などを大規模に改築することが決定しました。費用の半分を国費で賄う大事業は、昭和 15(1940) 年の正遷座祭（せいせんざさい）をもって完成します。

仮殿遷座祭絵巻（かりでんせんざさいえまき）（図５）は、このうち本殿が完成するまでの間、御神体を仮殿へ遷した、昭和 12(1937) 年の儀式を描いた絵巻です。儀式の記録として貴重なだけではなく、絵画としても彩色の美しさが際立ち、叙情性やあたたかみをも感じさせる作品です。旧制浦和中学校の美術教師・福宿光雄（ふすきみつお）が絵を描き、神道学者・宮地直一（みやじなおかず）が詞書（ことばがき）を書いています。

このほか、その多くが展示初公開となる氷川神社所蔵の貴重な資料をはじめ、地域の歴史を物語る資料が展示されます。大宮公園の昔を知っている方は懐かしいものに出会えるかもしれません。花見と一緒に、展覧会もお出かけのご予定に入れていただきたいと思います。

（展示担当　池田伸子）

※関連事業は裏表紙に記載しています。

図５　仮殿遷座祭絵巻 下巻 (部分)　昭和 19(1944) 年　武蔵一宮氷川神社蔵

民俗展示室は「農業と暮らし」に衣替えしました。

民俗展示室では、埼玉県の伝統的な習俗や儀礼を展示公開しています。今回は、これまでの「日々を生きる　埼玉の衣食住」に代わり「農業と暮らし」というテーマで、埼玉県に暮らす人々の生活文化を特集します。農業は、植物や動物の命を育み、人間の生活に役立てる営みです。米や麦・野菜を食糧として栽培し、それらの農作物で飼育した家畜も食糧となります。綿や麻・養蚕は衣服となり、植林した樹木は住居の材料となります。農業は私たちの衣食住の生活を支える基本的な生産活動です。

自然を相手にして営まれる農業は、気候や土壌の自然環境に大きく左右されてきました。山間地域や丘陵地域・台地や低地といった自然条件の違いは、気温や降水量に関連して農業の形態に影響をあたえてきました。一方、河川改修による灌漑施設の整備や作物品種と土壌の人為的な改良も行われてきました。

本展示では「北武蔵の農具」（国指定重要有形民俗文化財）を中心にして、埼玉県の稲作･麦作･養蚕･野菜作り・鍛冶屋と棒屋を展示しています。展示資料は、農具が電動化する前の、人力と畜力を基本とする農業に関わる技術文化を伝えるものです。ここでは、稲作・麦作・養蚕を簡単に紹介します。

稲作

稲作には、水田で栽培する水稲と畑で栽培する陸稲があります。かつて水の得にくい丘陵地や台地では、畑で麦と陸稲の二毛作が行われていました。また、雨水や湧水で経営されていた大宮台地の湿田では、田植えをせず、灰や堆肥と混ぜた種籾を摘まんで直播（じかま）きする「摘田（つみた）」が行われていました。灌漑用水が完備した水田が普及したのは、昭和 30 年代以降のことです。

麦作

麦は秋に種を畑にまき、冬から春にかけて育て、初夏に収穫する作物です。麦は丘陵地と台地での主要作物で、埼玉県は明治時代から全国屈指の生産量を誇ってきました。かつて秩父郡から大里郡にかけては、麦の種を下肥（人糞尿）と堆肥に混ぜて畑にまく「垂（た）れ蒔（ま）き」という麦まきの方法が行われていました。また低地の排水良好な水田地帯では、麦と米の二毛作が行われていました。

養蚕

養蚕は、桑の葉を蚕に与えて育て、繭を収穫する仕事です。古くは県西部の山間地域で営まれていました。春季に一回だけであった養蚕は、明治期になると技術改良が進み、年に４回から５回にわたって収穫ができるようになり、農家の貴重な現金収入となりました。第二次大戦後は、化学繊維が普及し生産量は減少しています。

稲作の脱穀・調整用具（唐臼・唐箕・万石）

農政学から民俗学への道を歩み『遠野物語』を著した柳田國男は、大きな影響を受けた本としてアナトール・フランスの作品を取り上げ、「言葉は土の中から生まれた。言葉を知らなければ土と人間の関係は分からない」という言葉に感銘を受けたと言っています（『柳田國男対談集』2010 年、筑摩書房）。フランスの『シルヴェストル・ボナールの罪』（2012 年、岩波書店）には「パンやぶどう酒ばかりでなく思想や感情や信仰をもって私たちをはぐくんでくれるこの大地（中略）古い塔や木立や空。童話や民話のなかの人物は、まったくああしたもののなかから、自然に生まれた」と語られています。

農業を英語ではアグリカルチャー、agriculture と言い、agrian は「農民の、土地の」、culture は「文化、教育、耕作、栽培」という意味があります。人々の暮らしと農業・自然・風土との関わりを、展示を通して学んでいただければ幸いです。

（展示担当　山田 実）

博物館に求められていること～高齢者の観覧料有料化を受けて～

昨年３月の話です。「高齢者の料金が有料になったのは納得できないと仰っているお客様がいるのですが…」と総合案内から総務担当に連絡が入りました。急いで駆け付けてみると、そこにいたのは御夫婦で来館されたお客様でした。声をかけると、「ようやく無料で観られる年齢になって楽しみに来ているのに、いつの間にか有料になっていた」という言葉が返ってきました。

その後、御夫婦とは３０分以上有料化の背景や博物館の運営状況についてお話をし、最終的に、高齢者の観覧料有料化の事情は御理解いただけました。その会話の中で強く印象に残った言葉があります。それは「最近は学芸員から解説を聞く機会がほとんどなくなった。サービスは低下しているのに料金だけ上がっている。利益を優先するなら民間に運営を任せた方がよい」というものです。

御夫婦の様子から、県立博物館に期待しているからこその御意見であることが伝わり、とても心に響きました。と同時に、多くのお客様が同様に感じているのではないかとも思いました。当たり前のことですが、私たち博物館は、今まで以上にお客様から観覧料を払うに値する、魅力的で充実した展示や事業を求められているのだと痛感した一件でした。

埼玉県では、平成２５年７月から県立博物館など１４施設で実施していた高齢者に対する使用料等の減免措置を廃止しました。高齢者の観覧料有料化の背景には、高齢者人口の増加、高齢者世帯の所得水準の変化など、高齢者を取り巻く環境の変化があります。高齢者の利用割合が高い当館にとって、平成２５年度は、有料化により高齢者の客足が遠のいてしまうのではないかと、気掛かりな１年でした。

減免措置が廃止されて、平成２６年１２月末で１年半経過しましたが、前年度の実績と比較することで影響が明らかになりつつあります。［図１参照］

結果を見ると、有料化直後、高齢者の利用割合は落ち込んでいましたが、平成２６年度は幸いなことに有料化前と同じ水準まで戻りつつあります。

ただ、この結果だけで有料化に御理解いただけたと考えるのは早計だと思います。高齢者の経済的負担が増したことは事実であり、いつまでもこの傾向が続くとは限りません。お金を払った分だけの満足が得られなければ、お客様はすぐ離れて行ってしまうことでしょう。

当館の使命は、様々な展示、体験活動等を通じて、本県の教育や学術、文化の発展に寄与することにあります。全ての来館者の知的好奇心を満たし、「楽しかった」「また訪れたい」という思いとともにお帰りいただく。そうなってはじめて、胸を張って観覧料をいただけるのではないでしょうか。当たり前のことですが、この原点を忘れてはならないと思います。

博物館には展示や事業などを担当する学芸員と、施設や予算などを担当する行政職員がいます。専門家である学芸員の視点に、素人である行政職員の視点が加わることで、より新鮮なアイデアが生まれる可能性もあります。一人でも多くのお客様に博物館にまた来たいと思ってもらえるよう、私自身、魅力ある博物館づくりのために尽力したいと考えています。

（総務担当　山本純二）

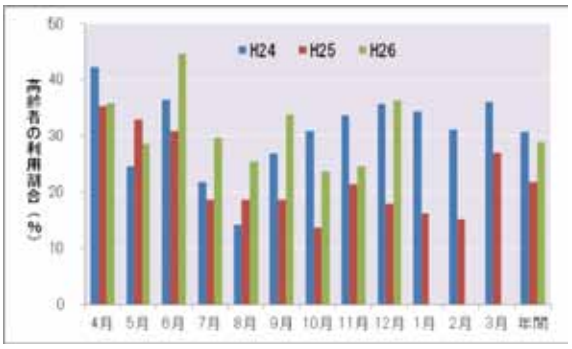

図１　高齢者の利用割合の推移

※高齢者の利用割合は、目視によるカウントのため誤差あり。

学芸員ノート

ムシ（文化財害虫）との知恵比べ

ムシが得意ではない方には恐縮です。日ごろ皆さんは博物館とムシとの関わりについて、あまり意識したことはないと思います。一般の方々の博物館に対するイメージは、やや暗めの照明と静寂さ、そして清潔さではないでしょうか。

もちろん博物館内の環境が悪いというわけではありませんが、ムシ一匹いない環境ではないことは確かです。当館では毎月一回定期的に館内の有害生物生息調査を実施しています。これは総合的有害生物管理（Integrated Pest Management ⇒ＩＰＭと省略）の一環として行っているものです。館内 80 か所に粘着シートの捕虫トラップを設置し、一か月後に回収します。そして、捕獲されたムシの種類と数を調査しています。

この結果からおおよその館内環境を知ることができます。ムシの侵入経路をみると博物館の弱点がわかります。お客様を迎える玄関口である自動ドアや展示室などにも設置されている非常口、そして職員の通用口などです。要は人の動きとほぼ一致しているのです。

施設の置かれる環境を大きく外周（危険地帯）・外周と接する部分（緩衝地帯）･建物内部（管理区域）の３つのゾーンに分けて考えてみます。当館は県民の憩いの場として有名な大宮公園の一角にある緑豊かな環境の中にあります。当然ムシたちにとっても生息しやすい環境といえます。このような環境にある以上、ムシの侵入は避けて通れません。いかに害虫を内部に入れないようにするのか。もちろん我々も黙って手をこまねいているわけではありません。

外周と接する部分にどのような工夫をしたらよいのか。施設担当者と協議しながら、また専門業者のアドバイスを受け改善を図ります。ひとつは外部と接する非常口の隙間を新しいクッション材で埋めていくことです。併せて非常口の機能を確保した上で、テープ状の目張りを施しました。そして、非常口の外側周辺へ忌避効果を持つスミチオン乳剤の散布も試みました。なんとかムシの侵入を防ぐためいろいろな工夫を重ねています。

しかし、敵もさる者これで完全に防げるようになったわけではありませんが、非常口周辺に設置したトラップに捕獲されるムシの数からみてもリスク管理上の効果は十分得られました。人の動きについて侵入してくるムシがいる以上、たくさんのお客様にご利用いただく展示室は外部からの侵入に常に晒されているといえます。ここで大事なことは、侵入したムシに建物の中を移動させないことです。調査のためのトラップとは別に、捕獲のためだけのトラップも多用するのはこのためです。

資料保存にとって一番の管理区画は収蔵庫です。ここは不特定多数の人が入ることのない場所であり、職員も入退室の目的と時間を管理されています。スリッパに履き替えた上で、粘着シートの上を歩きスリッパの汚れを取り除きます。これは職員を捕獲する目的ではありませんので、捕虫トラップより弱い粘着力です。最も重要なことは収蔵庫の中にムシを入れないことですが、一度だけムシが侵入する場面に出くわしたことがあります。

博物館の業務として資料の貸借はよくあります。ある貸出業務に携わっていた時のこと、美術品運搬専門業者が持ち込んだ梱包用段ボールからクモが１匹ぽとりと床に落ちました。もちろんすぐに捕まえ外に逃がしましたが、こうやって侵入を許してしまうこともあるんだと認識を新たにした貴重な経験でした。ムシを根絶するのは不可能なことです。いかに被害を減らしていけるかというリスク管理をこれからも考えながら、日常の資料管理を適切に推進していきます。

（資料調査・活用担当　岩本克昌）

歴史のしおり

埼玉県と自転車

一昨年に引き続き、昨年も世界最大の自転車ロードレース「ツール・ド・フランス」の名を冠した「さいたまクリテリウム」がさいたま市で開催され、大いに盛り上がりました。自転車は、健康やエコ意識の高まり、東日本大震災時の交通機関の混乱などを背景に、その機能に再び注目があつまり、近年小さなブームになりつつあります。近年では、県内の自転車道の整備が進み、優良なサイクリングコースが多々設けられていること、また個人の自転車保有率が日本一であることなどから、埼玉県は自転車王国に名乗りをあげています。

ところで、世界最古の自転車の原型が発明されたのは、実は埼玉県と言われています。享保14年(1729)、武蔵国児玉郡北堀村(現在の本庄市北堀)の農民であった庄田門弥という人物が、足板を踏んで漕ぐことで自走出来るからくりを造ったという記録が残されています。これが世界初の自転車であった、とも考えられています。庄田門弥は、からくりの技術を応用し、独自に自走式の「船」の開発に乗り出しました。これが「陸船車」です。その名の通り、今の自転車の姿からは程遠く、小船に車輪が付いたような見た目でした。厳密に言えば自転車ではない、という意見もありますが、本場欧州で自転車開発がなされる1800年代よりも、100年近くも前に生み出された、世界で初めてペダルを踏んで自走出来る乗り物であったことは間違いありません。

陸船車復元模型　150分の1図
〈本庄まちNET　蔵〉

当時、幕府によって新技術、特に乗り物の類いの開発は厳しく制限されていました。物資の大量輸送を可能にすると、武器の流入を許し反乱の恐れがあることや、参勤交代が意味を成さなくなるからです。しかも道はほとんど舗装されておらず、車輪の稼働には不向きでした。しかし陸船車はその仕掛けが話題となり、ついには時の将軍徳川吉宗も上覧するところとなりました。また、この庄田門弥の発明に影響された彦根藩士平石久平次時光によって、享保17年(1732)、さらに改良された新製陸船車の開発もされました。

残念ながら上記の理由等でこれらが乗り物として普及するには至りませんでしたが、このような技術がいち早く日本で開発されていたことは、当時の日本の技術水準の高さを物語っているともいえます。

時は流れ、日本に欧米式の自転車が広まり始めたのは文明開化以降です。明治初期には、アメリカから輸入された自転車で当時1台200円程度、現在の価格にしておよそ400万円近い値段のする、大変高額なものでした。さらに自転車税が課され、当初自転車は一部の富裕層のみの乗り物でした。しかし、やがて第一次世界大戦で海外製の自転車やその部品の輸入が難しくなったことをきっかけに、国内生産の需要が高まり、徐々に庶民にも普及し始めます。このように、自転車の発展には、幾つもの時代背景の影響があったのです。

こうして自転車は、輸送手段からスポーツ競技まで、現在でも広く愛される交通手段となりました。そんな自転車で盛り上げを図る埼玉県ですが、実は自転車の歴史とこのような関わりもあったのです。

（展示担当　奥村麻由美）

THE MUSEUM

歴史と民俗の博物館イベント情報(3月～5月)

埼玉県のマスコット コバトン

■企画展「氷川神社と大宮公園」　平成 27 年 3 月 21 日（土･祝）～ 5 月 10 日（日）

3 月

7日（土）十二単・小袿と男子装束の着装体験
博物館裏方探検隊
8日（日）型付け藍染め
14日（土）博物館裏方探検隊
21日（土･祝）企画展「氷川神社と大宮公園」オープン
博物館春まつり
博物館裏方探検隊
28日（土）博物館裏方探検隊
29日（日）企画展展示解説

4 月

4日（土）博物館裏方探検隊
11日（土）博物館裏方探検隊
12日（日）企画展展示解説
18日（土）企画展記念講演会
①「氷川神社の歴史」
②「大宮公園の歴史と文学」
博物館裏方探検隊

4 月

25日（土）歴史民俗講座
「氷川神社に伝わる二つの絵巻
～氷川神社行幸絵巻と仮殿遷座祭絵巻」
博物館裏方探検隊
26日（日）企画展関連事業
大宮公園ウォーキングと氷川神社見学会

5 月

2日（土）博物館裏方探検隊
3日（日･祝）企画展展示解説
9日（土）博物館裏方探検隊
10日（日）企画展「氷川神社と大宮公園」最終日
企画展展示解説
16日（土）博物館裏方探検隊
23日（土）博物館裏方探検隊
30日（土）博物館裏方探検隊

企画展「氷川神社と大宮公園」関連事業
記念講演「共催：大宮浦高会」
講演①「氷川神社の歴史」
講師：東角井真臣氏（武蔵一宮氷川神社権宮司）
講演②「大宮公園の歴史と文学」
講師：宮瀧交二氏（大東文化大学文学部教授）
日時：4 月 18 日（土）13:00 ～ 15:30
会場：当館講堂
申込:3 月 18 日（水）から電話受付（先着 100 名）

企画展展示解説（事前申込不要）
日時：3 月 29 日（日）・4 月 12 日（日）
5 月 3 日（日・祝）・5 月 10 日（日）
いずれも 13：30 ～（約 30 分）

◆博物館への資料寄贈をお考えの方へ◆
まずお電話で御一報ください。
TEL:048-645-8171（資料調査・活用担当）
詳しくはホームページを御覧ください。

■交通機関
東武アーバンパークライン（野田線）
大宮公園駅下車徒歩5分

埼玉県立
歴史と民俗の博物館（編集発行）
Saitama Prefectural Museum of History and Folklore
〒330-0803 さいたま市大宮区高鼻町 4 丁目 219 番地
TEL.　048-641-0890（管理）
048-645-8171（学芸）
FAX.　048-640-1964
http://www.saitama-rekimin.spec.ed.jp/

埼玉県立歴史と民俗の博物館だより
Vol.9-3　（通巻）第27号
2015年2月20日発行